

ダルヴェルジン・テパ出土基壇模型に関する一考察

川崎 建三

On the Miniature Rectangular Clay Foundation from Dal'verzin-tepa, Uzbekistan.

Kenzo KAWASAKI

ダルヴェルジン・テパ城砦址の発掘調査において中世初期（紀元7～8世紀）の住居址から焼成粘土製基壇模型が出土した。その底面には、蝸牛状の文様が浅彫りされており、文様は第二仏教寺院址出土の菩薩像頭部の巻き毛を表している。本稿では、基壇模型の本来の用途と文様の意味について検証を試みた。その結果、本資料の製作時期を仏教寺院活動期（紀元2～4世紀）に比定でき、小型仏塔の台として使用された可能性が浮かび上がってきた。また基壇模型の浅彫りは、塑像の巻き毛を大量生産するための型として実用されたのではなく、仏陀・菩薩像崇拝の象徴として刻まれた可能性を指摘した。さらに中世初期には、基壇模型が家庭用祭壇に供える灯明皿の台として利用されたと考えられる。

キーワード：基壇模型、小型礎石、祭壇、塑像、仏陀像、菩薩像、型、巻き毛

A miniature representation of a rectangular clay foundation was excavated in a house dated to the VII-VIII centuries in the citadel of Dal'verzin-tepa, Uzbekistan. The bottom of this object is engraved with a snail-shell motif that can be described as representing the curly hair of the Bodhisattva's head from a clay sculpture excavated from the Buddhist temple of Dal'verzin-tepa. In this report, the author investigated the original function and meaning of the relevance of this miniature rectangular clay foundation, and discovered that the item was made during the period when the Buddhist temple (II-IV centuries) was still in use. Thus, it was likely used as the base of a miniature stupa. The engraved patterns were not of practical use as a mold for mass-producing gypsum snail-shell curls on the clay heads, but rather engraved as a symbol of Buddha and Bodhisattva worship. In addition, the foundation was also used as a stand for the plate of votive light customarily offered at domestic altars during the early Middle Ages.

Key-words: miniature clay foundation, small base, altar, clay sculpture, statue of Buddha, statue of Bodhisattva, mold, curly hair

はじめに

ダルヴェルジン・テパは、ウズベキスタン南部のスルハンダリア川右岸に位置し、アムダリア河以北の遺跡の中で、古テルメズに次ぐ最大級の都城址である（図1）。遺跡の総面積は47ヘクタールであり、城砦（ツィタデリ）と防壁に囲まれた市街区（シャフリスタン）から構成されている。ダルヴェルジン・テパでは、1949年以降、タシュケント市のハムザ記念芸術学研究所（現在名：芸術学研究所）により考古学調査が行われ、1980年代半ばまでに土器焼き窯群、陶工の居住区（DT9）、大邸宅（DT5、DT6）、神殿（DT3）、仏教寺院（DT1、DT25）、共同墓地（DT14）などが相次いで発掘された（Пугаченкова, Ртвеладзе 1978）。特に都城内と郊外における二つの仏教寺院址の調査では、クシャン朝期以降の仏教彫刻が発見され¹⁾、中央

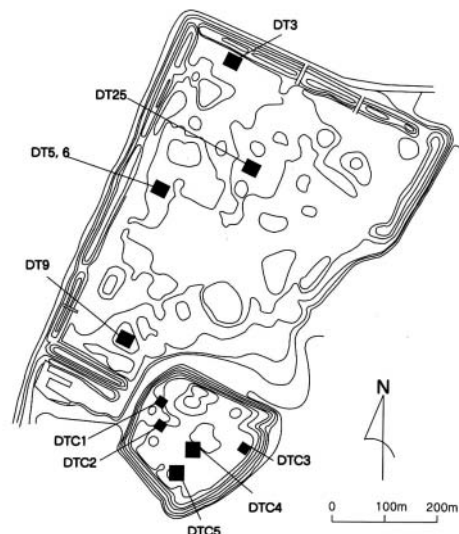


図1 ダルヴェルジン・テパ平面図（田辺・堀 1996: 103）

アジアにおける仏教文化の様相を解明する為の貴重な資料が得られた (Пуначенкова, Ртвеладзе 1978; Пуначенкова, Тургунов 1989; 加藤 1990)。考古学調査を牽引してきたのは、G.A.プガチェンコワを長とするウズベキスタン芸術学研究所の調査隊であり、1989年以降、日本の調査隊も共同調査の形で発掘を行ってきた²⁾。

1996年に開始された「日本・ウズベキスタン合同調査団」によるダルヴェルジン・テパ城砦址の発掘調査では、中世初期³⁾ (紀元7～8世紀)の住居址が検出され、多数の出土遺物が得られた (田辺・堀 1996, 1997, 1998, 1999; 田辺・山内 2000)。これら遺物の中には、恐らく市街区から運び込まれたと思われる遺物が存在する。そのうちの一つにDTC4-18K発掘区の第2号室⁴⁾から出土した焼成粘土製基壇模型 (図2)⁵⁾がある (田辺・堀 1996: 112-113; Тургунов, Ильясов, Восковский 1997)。この基壇模型で注目されるのは、底面に施された浅彫りの形であり、それはダルヴェルジン・テパ第二仏教寺院址 (DT25) 出土の塑像頭部の髪形を想起させる (Ильясов, 1997: 47)。これら塑像 (図11, 12) は、菩薩像と見做され、その髪形は、「垂れた二重の巻き毛の形」をなし、それぞれの頭部に「花冠」と「二列のロゼット文様の冠-鉢巻」をつけている (創価大学・ハムザ記念芸術学研究所 1991: 276-277)。

基壇模型に施された浅彫りは一体何を意味するのか。まず考えられるのが、塑像の型であり、塑像製作のための道具として使用された可能性である。ダルヴェルジン・テパ出土の塑像は、粘土と石膏および型押しされた細部の組み合わせによる製作法に特徴がある。ここでは、基壇模型の

浅彫りが、塑像の頭髪を大量生産するために用いられた型と見做すことが可能であるか否かを検証し、本資料の用途について考察を試みた。

本資料の紹介

基壇模型の形状は3段からなる方形基台の上に円座が載り、最上段の円座上面は中心に向かい緩やかにくぼんでいる。概ね轆轤で整形され、方形基台部分はほぼ垂直に削られるが、円座は歪みが激しい。胎土は淡色で、小石を含み、表面には部分的に煤けた痕跡が確認される。底面には、中心から外れて先端が湾曲した2つの文様が向かい合い浅彫りされている。底面の寸法は、基台最下段の1辺が13.2 cm、全高8 cm、浅彫りは4.5 × 2.5 cmを計測する。

基壇模型の例

さて、基壇模型は如何なる目的で作られたのか。本資料が出土した住居址の機能した時代、すなわち紀元7～8世紀の遺物の中には、今のところ類例を見出せていない。一方、紀元前3世紀から紀元4世紀までのバクトリアでは、方形基壇の形状を呈する遺物が存在する。それらは、アムダリア河以北・以南の遺跡から出土した小型礎石、奉献祭壇、小型仏塔などに見られる。以下、先行研究を参考にそれぞれの類例を概観してみたい。

1. 小型礎石の例

プガチェンコワは、戦前における古テルメズの調査報告で、石製建材とともに小型礎石4点の存在を紹介した



図2 基壇模型 ダルヴェルジン・テパ城砦址出土
写真 (日本・ウズベキスタン合同調査団撮影) 実測図 (田辺・堀 1996: 112)

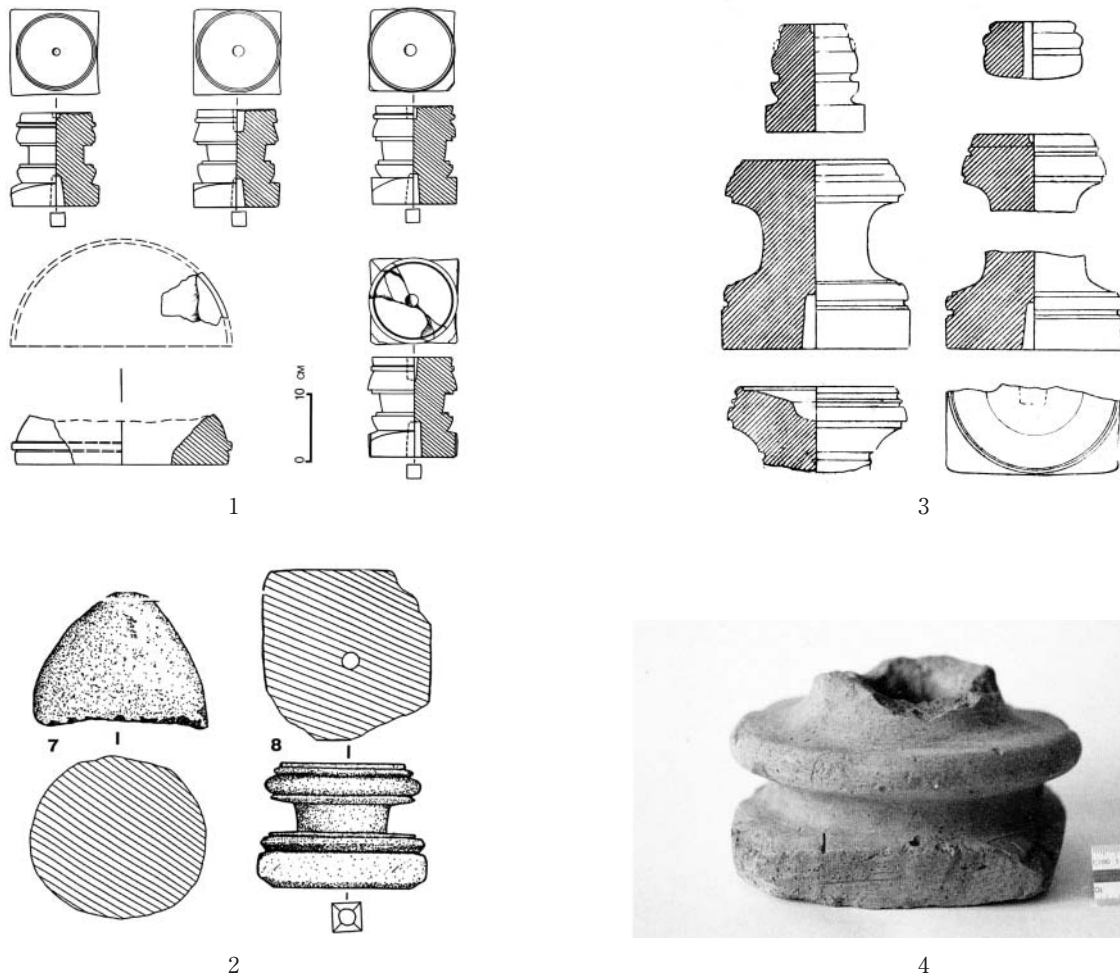


図3 小型礎石 (A 類)

1. カンプル・テパ、礼拝室出土、大理石、紀元1世紀（Курбанов 2000: рис. 10）2. カンプル・テパ、祭壇の壁龕出土、大理石、紀元1～2世紀（Сверчиков 2001: рис. 13）3. ミルザベク・カラ出土、石灰岩、紀元1～2世紀、チョプリ・デベ出土、大理石（Пилипко 1985: Табл. VIII）4. ダルヴェルジン・テパ第二仏教寺院址出土、焼成粘土、紀元2～4世紀（加藤 1997: 図 2-60）

（Пугаченкова 1945: 78-79, рис. 12）。すなわち、古典古代の伝統を踏襲したアッティカ式小型柱礎（図4 M-1）、同じく小型柱礎断片（図4 M-2）、高い方形基台の上に玉縁と3段の平縁が連続して載る「小卓」（図4 M-3）、そして方形の脚の上に玉縁と低い台が載る「小卓」（図5 M-4）である。このうち、M-1の表面は暗赤色で彩色されており、金箔を施す為の下塗りであるという。また、M-3、M-4の「小卓」については、宗教儀礼に用いられた遺物であると記述されている。

プガチェンコワは、石製小型建材について、壁龕の一部、柱礎、小像の台座、奉献用祭壇の台の可能性を指摘した（Пугаченкова 1973: 88）。これら小型礎石は、グレコ・バクトリア時代にその製作が始まるとされる（Пилипко 1985: 84）。

グレコ・バクトリア期からクシャン朝期の要塞都市であるカンプル・テパでは、内城の33号室（礼拝室）、95号

室および遺跡北東部の住居址5号室で大理石製の小型礎石が出土した（図3-1, 2）。その中には、基台の上に刳型が複雑に刻みだされ、アッティカ式小型柱礎とは異なるカンプル・テパ特有の形状を呈したものがある。これらは、室内に設置された祭壇の柱を支える小型柱礎であり、報告者は火の祭壇に用いられた可能性を強調している（Русанов 2000: 23, 24, рис. 7, 8; Сверчиков 2001: 55, рис. 13-7, 8）。

タジキスタンでは、テバイ・シャー遺跡をはじめ、バルハル郡ピャンジ川流域の集落址やケイ・コバド・シャーなどの南部地域で小型礎石が出土し（Литвинский, Седов 1983: 26-27, 145, Таб. III, 2-5）、トゥルクメニスタンではミルザベク・カラ、チョプリ・デベから小型礎石（Пилипко 1985: Таб. VIII）が出土している（図3-3）。タフティ・サンギンのオクサス神殿では、石製柱礎とともに、小型礎石が2点出土している（図4-3, 図5-3）。リトヴィンスキーは、西アジアの柱礎との比較研究を行い、タフテ

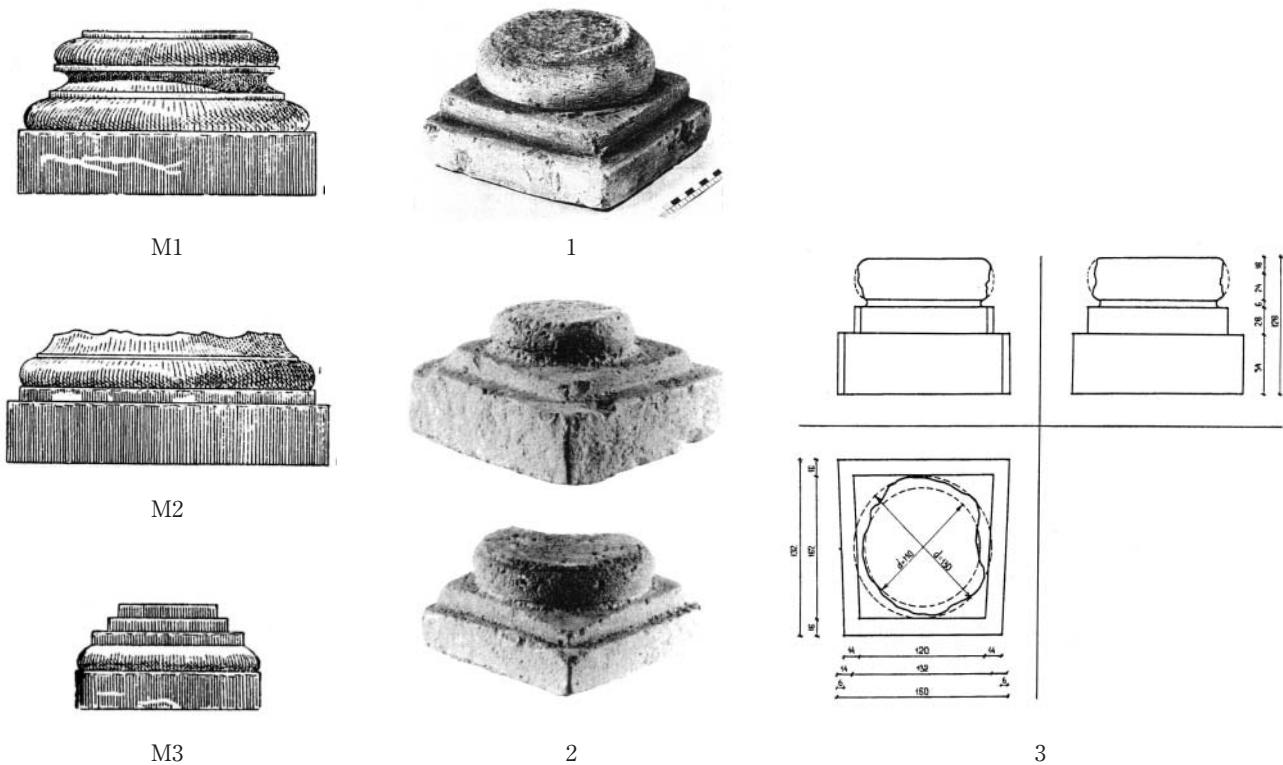


図 4 小型礎石 (B 類)

M1 ~ M3 古テルメズ出土、石灰岩 (Пугаченкова 1945: рис. 12) 1. アイ・ハヌム出土、石灰岩。紀元前2世紀 (Bernard 1970: fig. 29) 2. アイ・ハヌム出土、石灰岩、紀元前2世紀 (Guillaume 1987: PL. XIX) 3. タフティ・サンギン出土、石灰岩、祭壇の部屋出土 (Литвинский, Пичикян 2000: Таблица 43)

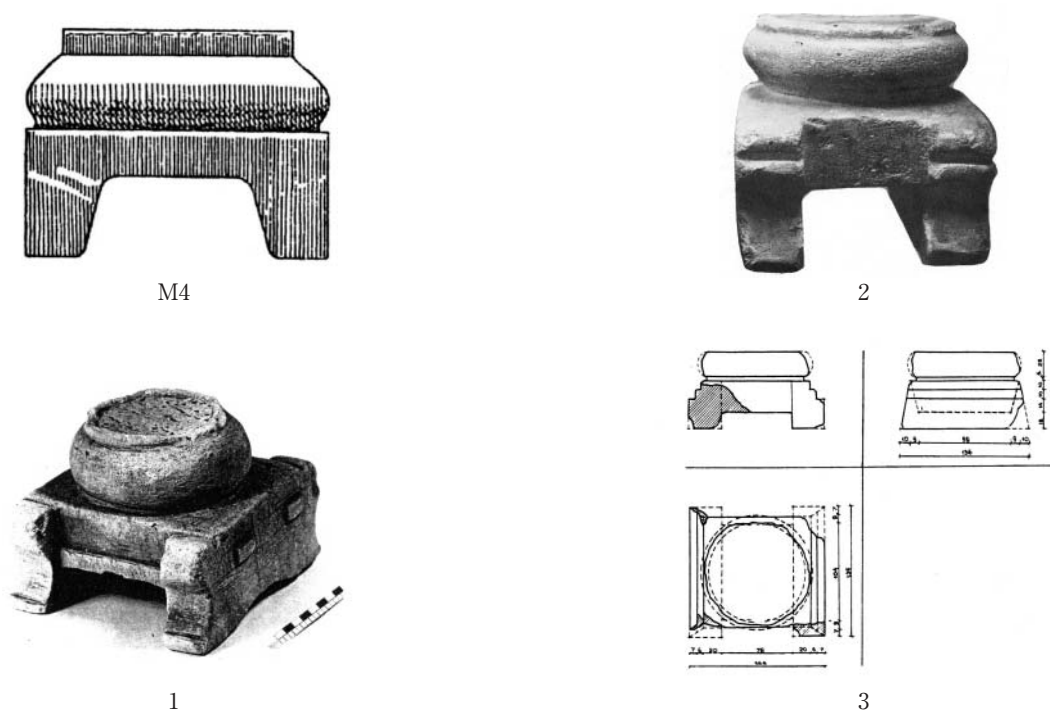
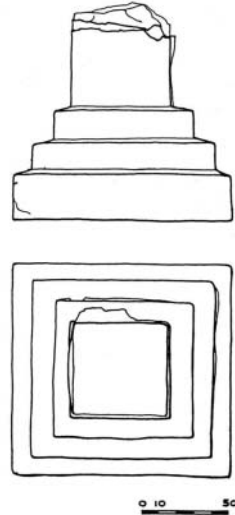


図5 小型礎石 (C類)

M4 古テルメズ出土、石灰岩 (Пугаченкова 1945: рис. 12) 1. アイ・ハム出土、石灰岩、紀元前2世紀 (Bernard 1970: fig. 30)
2. イラン・テペ出土、石灰岩 (Пугаченкова 1973: рис. 9) 3. タフティ・サンギン出土、石灰岩、祭壇の部屋出土 (Литвинский, Пичилян 2000: Таблица 43)



1



2

図6 奉献用祭壇

1. カンプル・テパ出土、焼成粘土、紀元前2～1世紀（創価大学 1991: No. 194）2. カラ・テパ出土、紀元3世紀（Mkrtychev 1993/94: Fig. 6）

イ・サンギン出土の柱礎が、紀元前6～5世紀のアケメネス・タイプの一つに属するとし、その後のパルティア、クシャーン朝と続く中央アジアの柱礎のモデルになったと結論付けた（Литвинский, Пичикян 2000: 141-153）

一方、アムダリア河以南では、アイ・ハヌム、チャカラク・テペ、ディルベルジンなどから小型礎石が多数出土している（図4-1, 2, 図5-1）。フランクホールは、アイ・ハヌム出土の小型礎石を8類に形式分類した（Francfort 1984: 81-84）。またチャカラク・テペの柱礎および小型柱礎は、出土状況から柱礎としての用途を為さず、二次的な目的で利用されたと考えられている（水野 1970: 97）。

これら小型礎石の形状はヴァリエーションに富むが、いわゆる方形基台の上に玉縁、平縁、円座などが刻みだされる列柱の柱礎を再現（模型化）したものであり、アムダリア河以北・以南のバクトリアで広くその出土例が知られている。また、上述したように、その多くが神殿あるいは礼拝室から出土しており、宗教的儀礼に伴う祭壇に用いられたことが指摘されている（Пугаченкова 1973: 88; Пилипко 1985: 84; Русанов 2000: 23, 24, рис. 7, 8; Курбанов 2000; Сверчиков 2001: 55, рис. 13-7, 8）。

ここでは、小型礎石の形状から、大まかに次の3タイプに分類したいと思う。

A類）円座の中心、または底部中心に柄孔が穿たれるもの（図3）

B類）円座が平もしくは中心に向かい緩やかな傾斜を呈するもの（図4）

C類）基台部分がΠ状の脚を呈するもの（図5）

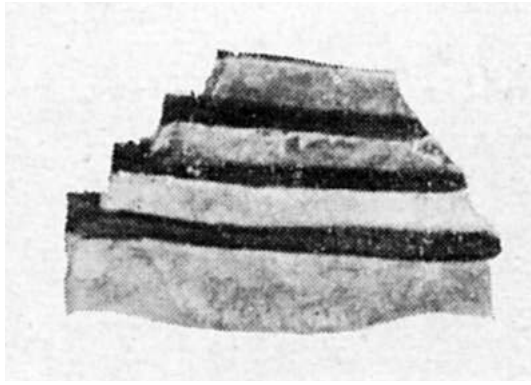
このうち、A類は、上部もしくは底部に柄孔があることから、柱を支える柱礎の役目を果たしたと考えられる。B類は、柱礎の場合もあれば、柱以外の台座をなしたことが考えられる。C類のΠ状の脚をもつ小型礎石については、同類の台座がガンダーラのレリーフ（図9）に認められ、柱礎というよりは、香炉台や供物台として使用されたかもしれない⁷⁾。

これら小型礎石は、グレコ・バクトリア期からクシャーン朝期にかけて、バクトリアの広範な地域に見られ、その多くが白色石灰岩または大理石を素材としている。

2. 奉献用祭壇の例

次に奉献用祭壇について、若干触れておきたい。

カンプル・テパでは、ダルヴェルジン・テパの基壇模型に近い奉献用祭壇（図6-1）が出土している⁸⁾。奉献用祭壇は、轆轤整形による焼成粘土で作られた祭壇の模型である。2段の方形基台の上に円座が2つ重なり、さらに最上段に中心部が緩やかにくぼんだ円座が載った形状を呈する（基台12.5×12.5 cm、全高13.5 cm）。これは内城の93号室から出土し、紀元前2～前1世紀に比定される（創価大学・ハムザ記念芸術学研究所 1991: 293, No. 194）。クルバノフの詳細な発掘報告によれば、93号室では6層の床面（レベル）が確認され、地山から数えて4層の床面からこの奉献用祭壇が出土している（Курбанов 2000: 55）。特に興味深いのは、奉献用祭壇の傍でテラコッタ製男性像およ



1



2

図7 小型仏塔

1. カラ・テパ出土、石灰岩、紀元2～3世紀 (Ставиский 1972: Табл. XIV)
2. ハティン・ラバト出土、石 (Пугаченкова 1973: рис. 10)

び首と肩にスカーフを巻く女神像が出土したことである⁹⁾ (Курбанов 2000: 55)。

カラ・テパでは、地上・洞窟寺院コンプレックスEにおいて、奉献仏塔の近くから石製の奉献用祭壇 (図6-2) が出土した。これは、3段の方形基台の上に方形の小塔が載る2段構成であり、全体が赤く彩色されていた (基台 12.6 × 12.7 cm、全高 13.7 cm) (Mkrtychev 1993/94: 101-105; Мкртычев 1996: 113-114)。

3. 小型仏塔の例

最後に、本資料の類例として、カラ・テパ仏教洞窟寺院出土の石灰岩製基壇模型に触れておきたい。スタヴィスキーは、1965年の調査においてコンプレックスBの洞窟式僧房から傘型模型とともに基壇模型が出土したことを報告した (Ставиский 1972: 24, 42, Табл. XIV)。傘型模型は直径 11 cm と 8 cm の2点があり、どちらも外側が赤色、内側が青色で彩色されていた。一方、基壇模型は全部で5点出土しており、いずれも断片である。1点は、長さ 5 cm、高さ 3 cm の階段状の方形基壇模型 (図7) である。他の4点は、円形基壇模型であり、半径は約 9 cm である。階段状の方形基壇模型は彩色されており、下から2段目と3段目には赤色顔料が確認され、最上段の刳型は側面が赤色、上面が青色で彩色されていた。円形基壇模型の最上段刳型にも赤色顔料の痕跡が確認された。また、1968年の調査では、同じくコンプレックスBの地上式僧院の中庭において、方形基壇模型が出土した。この4段からなる方形基壇模型は、1965年出土の方形基壇模型とほぼ同じサイズであり、中2段に赤色、最上段に青色、最下段に緑色の彩色の痕跡が確認された。スタヴィスキーは、傘型模型が仏塔の傘蓋であり、基壇模型を小型の仏塔であると考えた

(Ставиский 1972: 42)。

基壇模型の製作時期と用途

以上、小型礎石、奉献用祭壇、小型仏塔の例を示したが、これらの資料と比較しながら、基壇模型の製作時期と本来の用途を検討してみたい。

まず、小型礎石と比較してみると、アイ・ハヌム出土の小型礎石 (図4-1, 2) は方形基台の上に円座が載り、その上面が平らなものやや深く窪んだものが見られ、基台の段数の違いはあるが、本資料の形状に近い。このタイプの小型礎石は、地面に固定するための柱台の高さが十分にあり、列柱の柱礎を忠実に再現していると思われる。本資料は、柱台のような高さはないが、全体の形状から柱礎や小型礎石を雛形として製作されたのではないかと考えられる。アイ・ハヌムの小型礎石は、紀元前2世紀に比定されている。

次に奉献用祭壇の例をみると、カンブル・テパ出土の祭壇模型は、基台の形が本資料と同じであり、ともに焼成粘土製である点も共通している。またカラ・テパの奉献用祭壇は2段構成の祭壇模型であり、正方形の段を重ねていく点は、本資料と類似している。これらは紀元前2～1世紀 (カンブル・テパ) と紀元3世紀 (カラ・テパ) に比定されている。

一方、ダルヴェルジン・テパでは第二仏教寺院址から焼成粘土製の小型基台 (図3-4) が出土しており、同じくシャフリスタンの神殿では、焼成粘土製の祭壇と香炉台が出土している (Пугаченкова, Ртвеладзе 1978: 139, 212)。このうち小型基台の形状は、カンブル・テパ出土の小型礎石 (図3-2) に近い。これは、ダルヴェルジン・テパにおいて、祭壇や壁龕の一部 (柱礎) に、石灰岩や大理石ではなく、



図8 砲弾形模型

ダルヴェルジン・テパ、表採、大理石、芸術学研究所蔵（筆者撮影）

焼成粘土が用いられていたことを示している。従って、本資料が焼成粘土製であることを見ると、基壇模型がシャフリスタンの活動期（紀元1世紀～紀元4世紀）の作である可能性を導き出せるのではないかと考える。

次に本資料の用途について考えてみたい。

カンブル・テパおよびカラ・テパ出土の奉献用祭壇は、本資料が単なる日用品ではなく、祭具の一つとして使用された可能性を示唆している。この場合、プガチェンコワ等が指摘するように、小型礎石が小像、奉献用祭壇などを置く台座であった可能性が高いことも考慮しなければならない。本資料を祭具の一つとみなす根拠としては、奉献用祭壇や奉献小塔、拝火壇¹⁰⁾などに階段状の方形基壇が採用されていることが挙げられるだろう。

ここでは、本資料の用途の一つとして、小型仏塔の基台の可能性を指摘しておきたい。この考えを補強する作例をカラ・テパの方形基壇模型に求めることができるだろう。上述したように、カラ・テパの僧房では傘蓋の模型とともに方形基壇模型が出土しており、スタヴィスキーは、小型（ミニチュア）の仏塔である可能性を指摘した。ダルヴェルジン・テパとカラ・テパの方形基壇模型は、ともに4段の階段状基壇をなしている点で共通している。ただし、前者（本資料）は、円座上面がゆるやかに窪んでいることから、この上に何かを置いたと考えた方が良いであろう。方形基壇模型全体を基台と見るなら、円座に伏鉢を載せたと考えられないだろうか。ダルヴェルジン・テパでは、大理石製の砲弾形模型が発見されている（図8）¹¹⁾。これは、高さ約8 cm、底部径約3～5 cmであり、底がやや丸みを帯びている。胴部には、アーチ型の龕が1つ穿たれ、龕の上下に網状の装飾が浮き彫りされている。上部には穿孔が施されている。龕は仏龕を表し、上部の穿孔には傘蓋の支柱を差し込むものと考えれば、仏塔の伏鉢を模型化したと看做せるのではないだろうか。当然のことながら、本資料

とこの遺物の出土地点が異なるため、それらが同時期に組み合わせて使用されたか否か確かめようがない。しかしながら、本資料が仏塔の基台である可能性を即座に排除すべきではないと思う。

アムダリア河以北の遺跡では、カラ・テパの他に、アイルタム、ウシュトゥルムッロで奉献小塔が出土している（前者は52×52 cm、高さ35 cm、後者は38×38 cm、高さ18～19 cmである）。これらは、基台と伏鉢が個々に作られた2段構成からなる奉献小塔である（Тургунов 1973: 56-57; Зеймаль 1987: 72）。アイルタム、ウシュトゥルムッロの奉献小塔は、基台側に柄孔があり、この点では、本資料と構造が異なるが、基台に伏鉢を載せる、あるいは円座に被せる小型仏塔（仏塔の模型）が存在していた可能性も考えられる。

さらに、スタヴィスキーは、方形基壇模型とともに、円形基壇模型の出土例もとりあげ、これを同じく小型の仏塔であると看做している。ダルヴェルジン・テパ第二仏教寺院址では、焼成粘土製の円形基壇模型が出土しており、スタヴィスキーによる小型仏塔の見解は、基壇模型の本来の用途を考える上で大変示唆的である。ちなみにハティン・ラバトでは石灰岩製建築材断片が多数出土しており（Пугаченкова 1973: 91, рис. 10）、この中には傘蓋が含まれ、仏塔に関係する遺物と思われる。従って、7段からなるピラミッド型台座（図7-2）は、カラ・テパ出土の方形基壇模型と同じく小型仏塔の可能性も考えられる。

さて、『佛説樓閣正法甘露鼓經』には造塔に関する次の記述がある。（この經典の記述と訳については、創価大学・国際仏教学高等研究所の辛嶋静志教授にご教示いただいた。）

若有如來・應・正等覺般涅槃後，用彼泥團作窣堵波大如阿摩勒果，上安相輪大小如針，覆以傘蓋由如棗葉，中安佛像同彼麥粒，下葬舍利如白芥子，我說此福廣大而勝於彼。



図9 納棺 (栗田 2003a: P4-IV)

(大正新脩大藏經 第十六冊 No. 704. A9)

(若し如來、應 (arhat)、正等覺 (samyaksambuddha) 般涅槃 (槃) の後に、彼の泥團を用いて窣堵波の大きさ阿摩勒果の如きを作り、上に相輪の大小 (大きさ) 針の如きを安 (お) き、覆うに傘蓋の由 (なお) 棗葉の如きをもってし、中に佛像の彼の麥粒に同じきを安 (お) き、下に舍利の白芥子の如きを葬る (もの) 有れば、我は説く、此の福は廣大にして彼に勝る、と。)

ここでは、泥團を用いて窣堵波を作ること、そして窣堵波、相輪、傘蓋、仏像、舍利が、阿摩勒果、針、棗葉、麥粒、白芥子などで表されるように極めて小さな仏塔であることを示している。

また、吉田豊氏は、西暦 401 年にコータンを訪れた法顕の記録や向達の見た仏塔の情報から、「小さい仏塔を作る習慣が古くからコータンにあり、その伝統が 10 世紀にも守られていたことが伺い知れる」と論じている (吉田 2003: 227; 吉田 2005: 15)¹²⁾。向達の見た仏塔とは、五代・宋時代の木製の仏塔であり、中には銀製の小さな仏塔が収められていたという (同上)¹³⁾。

バクトリア・トハリスタンと東トルキスタンの間に直接的関連があったことは従来指摘されており (バクトリアとミーランの壁画の類似など、加藤 1996: 189)、コータンにおける小仏塔礼拝の伝統をバクトリアに認めることも可能であると思われる。

従ってアムダリア河以北における奉獻小塔の例、經典の記述、コータンにおける小仏塔製作の伝統などから、大塔、奉獻小塔 (図 10) のほかに仏塔模型とも称される極めて小さな仏塔が存在していたことが推測できる。加えて、カ



図 10 仏塔礼拝 (栗田 2003a: No. 533)

ラ・テパの傘型模型 (傘蓋) および方形・円形基壇模型 (小型の仏塔) が僧房から出土したことは、僧房で小仏塔を礼拝する信仰形態があったことを窺わせるものではないだろうか。

以上のことから、本資料は、グレコ・バクトリア期 (紀元前 2 世紀) からクシャン朝期 (1 ~ 2 世紀) のバクトリアに普及していた柱礎および小型柱礎を雛型とし、奉獻用祭壇や香炉製作において粘土成形が優勢であったシャフリスタンの活動期、すなわち紀元 1 ~ 4 世紀に製作された可能性を見出すことができるだろう¹⁴⁾。また本資料の用途については、円座の上に何かを載せた台、とりわけ仏塔模型の基台の可能性を指摘しておきたい。

「蝸牛状文様」の検討

冒頭で述べたとおり、筆者は基壇模型の底面に施された文様が塑像の髪型を表したものと考えているが、その根拠を以下に述べておきたい。

問題の文様は、一重渦を巻いた部分と先端が尖った部分をもつ S 字の変形した形状をなしている。全体として蝸牛に似ているので、ここでは便宜的に「蝸牛状文様」と表現しておく。

基壇模型が発見された住居址の機能した時代、すなわち紀元 7 ~ 8 世紀前後に製作された作品の中に「蝸牛状文様」を探してみたが、今のところ周辺地域で作例は確認できていない。エルミタージュ美術館蔵のロシア出土銀製皿に描写された「城砦包圍図」(紀元 6 ~ 7 世紀、Пугаченкова, Ремпель 1965: ил. 123) には、城の柱頭部分にコンマの形の文様が連続して打ち出されているが、蝸牛状ではなく、しかも建築装飾であり、基壇模型の「蝸牛状文様」とは相違している。

唐代作の興福寺断碑の獅子の鬣は、毛の先端が一重渦を巻く、「巻き毛」で表現されている (『シルクロード華麗なる植物文様の世界』85 ~ 87 頁を参照)。しかしながら、



図 11



図 12



図 13-1

図 13-2



図 14-1



図 14-2

図 11 菩薩像 ダルヴェルジン・テパ第二仏教寺院址出土 写真(創価大学 1991: No.130) 模写図(阿部貴美江氏)

図 12 菩薩像 ダルヴェルジン・テパ第二仏教寺院址出土 写真(創価大学 1991: No.126) 模写図(阿部貴美江氏)

図 13 「巻き毛」石膏断片 ダルヴェルジン・テパ第二仏教寺院址出土 写真(筆者撮影) 模写図(阿部貴美江氏)

図 14 1. ササン朝シャープール1世金貨(田辺 1993: No.44) 2. クシャノ・ササン朝オルムズド金貨(田辺 1993: No.50)

ダルヴェルジン・テパでは、獅子の図像は見られず、興福寺断碑の作例とは地理的隔たりがあるため、基壇模型の「蝸牛状文様」が獅子の鬣を表現したものとは考え難い。

次にコインに注目してみると、ササン朝、クシャノ・ササン朝、キダラ・クシャン朝のコインの中に「巻き毛」を見ることができる(田辺 1993)。それは、歴代王の側頭部に描写されており、髪の毛が根元から波打ち、先端が一重渦巻いている(図 14-1, 2)。このような頭髪や「顎髭の球体処理」(田辺 1993: 12)は、ササン朝美術の特徴と見られる。一方、ダルヴェルジン・テパでは、グレコ・バクトリア時代(紀元前3世紀)からチャガニアン時代(紀元7～8世紀)までのコインおよびシャイバーニー朝(15～16世紀)のコインが出土または表面採取されているが、ここではササン朝、キダラ・クシャン朝のコインはほとんど存在しないので、クシャノ・ササン朝のコインが該当し

よう¹⁵⁾。クシャノ・ササン朝のコインでは、オルムズド1世、オルムズド2世などの王胸像に「巻き毛」を見ることができ(同書)、本資料の「蝸牛状文様」に近い。

次に塑像の例を検証したい。ダルヴェルジン・テパ第二仏教寺院址から出土した塑像の髪型は、波状、螺旋、半月形、S字形、巻き毛などであり、その形態は多様である(Пугаченкова, Тургунов 1989)。この中で、「巻き毛」は、毛の根元から括れつつ先端が一重渦を巻き、2本から5本の線で髪の毛が表現されていて、「蝸牛状文様」に近い。このような「巻き毛」は、菩薩像(図 11)、菩薩像頭部(図 12)、「巻き毛」塑像断片数点(図 13-1, 2)に見られる。これら菩薩像は頭に花綱やメダイオンを冠し、額に「巻き毛」が垂れている。2体の菩薩の「巻き毛」は額の中心から側頭部にかけて左右対称に貼付されているが、図 11 の菩薩の「巻き毛」は、毛の先端が額の中心に向かい渦を巻くのに対



図 15-1

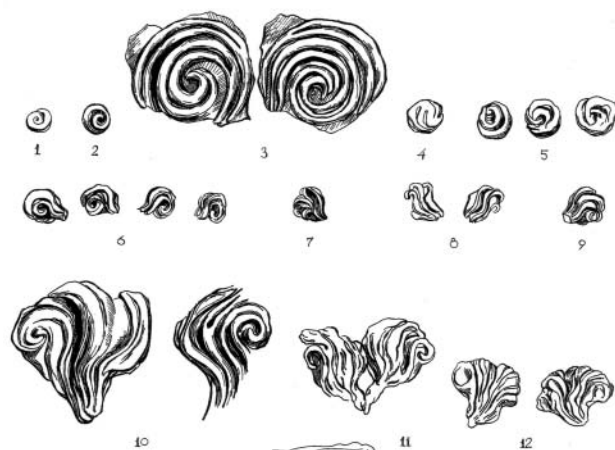


図 15-2

図 15-1 アジナ・テパ 塑像断片 模写図 (Litvinskii and Zeimal' 2004: Fig. 109)

図 15-2 アジナ・テパ「巻き毛」塑像断片 模写図 (Litvinskii and Zeimal' 2004: Fig. 110)

し、図 12 では、「巻き毛」は顚に向かい先端が渦巻いている。つまり右巻きと左巻きの「巻き毛」を用い菩薩の髪を表現していたことがわかる。その他の石膏断片に見られる「巻き毛」がどの塑像のものかは不明である。

同様の巻き毛は、ダルヴェルジン・テパの塑像の他に、紀元 2 世紀～4 世紀のファヤズ・テパ出土と伝えられるメダイヨンの頭光を冠した仏像（または菩薩像）頭部断片（テルメズ考古学博物館蔵）に見られる。これは、いわゆる螺髪ではなく、髪の根元から括れながら先端が一重渦巻く「巻き毛」である。また、紀元 7 世紀末～8 世紀初のアジナ・テパ出土の仏像は、髪型にヴァリエーションを持ち、「巻き毛」は頭の中心から左右対称に整然と貼付されている（図 15-1, 2）。

ダルヴェルジン・テパとファヤズ・テパ、アジナ・テパの「巻き毛」を比べると、毛の根元から渦を巻くまでの長さの違いが見られ、ダルヴェルジン・テパのそれは、比較的ゆったりとしたウェーブをなしている。この点で、ダル

ヴェルジン・テパの塑像の「巻き毛」は、クシャノ・ササン朝のコイン（オルムズド 1 世など）に見られる頭髪表現に極めて近いことが認められる。同寺院址の第 2 建築期の層からは、クシャノ・ササン朝のコインが大量に出土しており、この中にはオルムズド 1 世の銅貨も発見されている（創価大学シルクロード学術調査団 1996）。仏教寺院の活動時期については、目下考察中であるため詳述は避けるが、「巻き毛」の形や菩薩像の後頭部に見られるディアデムのリボンの存在からクシャノ・ササン朝時代である可能性は高い（同寺院址の時期については Ильясов 1996; 小山 1996; 田辺・前田 1999: 203; スタヴィスキ・加藤 2002: 19; 岩井 2003: 52 を参照）。バクトリア北部におけるクシャノ朝期以降の仏教美術の特徴は、インドおよび北西インドの仏像製作の規範に則りながら、造形の細部においてこの地方独自の表現方法を生み出していた点にあると指摘されている（創価大学シルクロード学術調査団 1996: 7）。その一つが仏像、菩薩像などに見られる髪型の表現であり、支

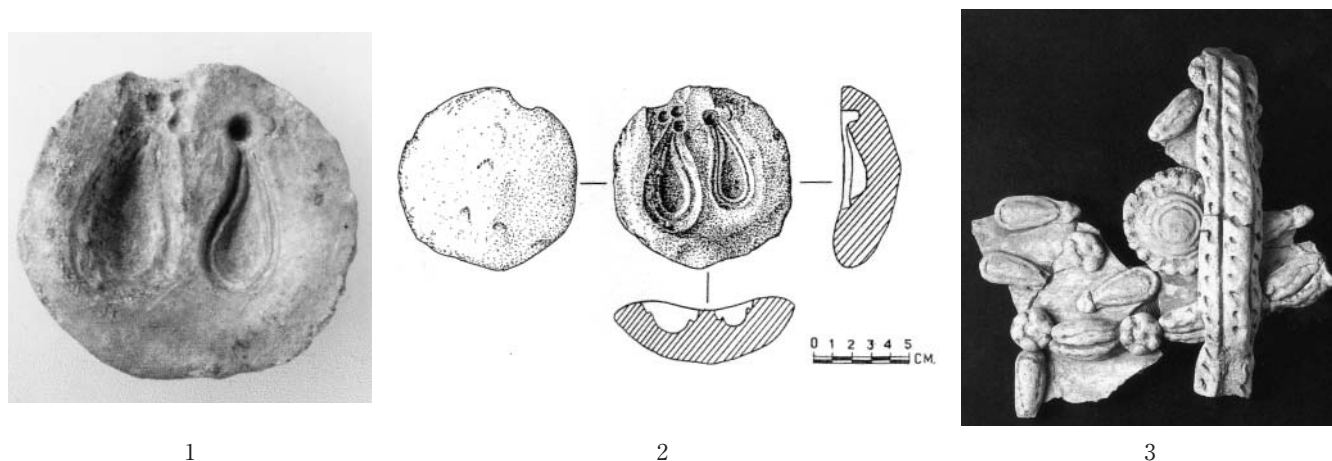


図 16 ダルヴェルジン・テパの石膏製型と塑像断片

1. 写真（日本・ウズベキスタン合同調査団撮影）2. 実測図（A. イスラモフ氏）3. 塑像断片（創価大学 1991: No. 140）

配者の姿や特徴と仏・菩薩像の特徴が結びついていると看做せるかもしれない。

本題に戻れば、コインと塑像に見られる「巻き毛」は、外形や渦巻き表現の点で基壇模型の「蝸牛状文様」に酷似している。また、上述したとおり、右巻きと左巻きの二つの「巻き毛」を用いて、仏像、菩薩像の頭髪を表現していたことから、基壇模型の向かい合う二つの「蝸牛状文様」がダルヴェルジン・テパの塑像の頭髪をモデルに描写された可能性が高いと考えるわけである。

以上の考察から、基壇模型の底面に掘り込まれた文様は、単なる建築装飾でもなければ、獅子の鬣でもなく、塑像の髪型の一つである「巻き毛」を表現したものであると看做せるであろう¹⁶⁾。

「蝸牛状文様」と型の出土例

次に基壇模型の底面に施された「蝸牛状文様」の用途（意味）について検討してみたい。本資料の用途について考察する際に最も重要な点は、文様が何時作られたかということである。つまり焼成前か焼成後か、そのいずれであるのか。

筆者は、文様を観察した際、それが雄型を用いてスタンブされたのではなく、道具を使い浅彫りされていることを確認するとともに、焼成前の生乾きの粘土に刻まれたと考えていた。しかし、再度画像で確認したところ、焼成の前とも後とも判断がつかないでいた。そこで、古代オリエント博物館の石田恵子氏に鑑定を依頼したところ、もし製作者が基壇模型の底面に文様を焼成前に刻んでいれば、彫刻刃やナイフなどで削る際に素材の粘土に含まれる石が動いていることがあるとのご指摘を受けた。このような視点か

ら精査してみると、基壇模型底面の所々に小石と思われる黒い小さな斑点が見られ、浅彫りされた部分では、それが動くことなく削られた断面であると思われる。従って、文様は、焼成後に刻まれたと見なす方が妥当であると判断した。上述したように浅彫りの形態は、ダルヴェルジン・テパ第二仏教寺院址出土塑像の二つの「巻き毛」を想起させるものである。では、この菩薩の「巻き毛」を表した浅彫りが塑像製作の型として利用されたと見なせるだろうか。

ダルヴェルジン・テパでは、第一、第二仏教寺院址において塑像が多数発見された。仏、菩薩、天部、僧侶、貴族、供養者、空想動物（マカラ）などの像である（創価大学シルクロード学術調査団編 1996: 6-13, 102-106）。ムクルティチェフは、第二寺院址出土の塑像について、(1) 土の上に石膏（ガンチ：雪花石膏に粘土を混ぜたもの）を重ね塗りした大型石膏像、(2) 石膏だけで仕上げた小型・中型石膏像、(3) 表面を薄い石膏で仕上げた大型粘土像、(4) 土だけで作られた大型粘土像、の 4 類に大別している（Мкртычев 2002: 138）。その大半は型を用いて製作する(3)と(4)のグループに属し、(2)の小型石膏像は型抜きだけで作られていることが多い。つまり、ダルヴェルジン・テパの塑像は、前時代のタフティ・サンギン、ハルチャヤンにみられる伝統的な塑像製作技法を踏襲しながら、手づくねとともに型造りによる製作技法を新たに導入した点に特徴がある（リョーヴシュキナ 1996）。型の利用は、概ね、頭髪や装身具など塑像の細部に認められ、型造りが普及していたことは明らかであるが、これまで実物資料として、型が出土した例は意外に少なかった。

そのような中、1996 年、ダルヴェルジン・テパ城砦址の発掘調査の際、村の住人から石膏製の遺物 1 点（図 16-

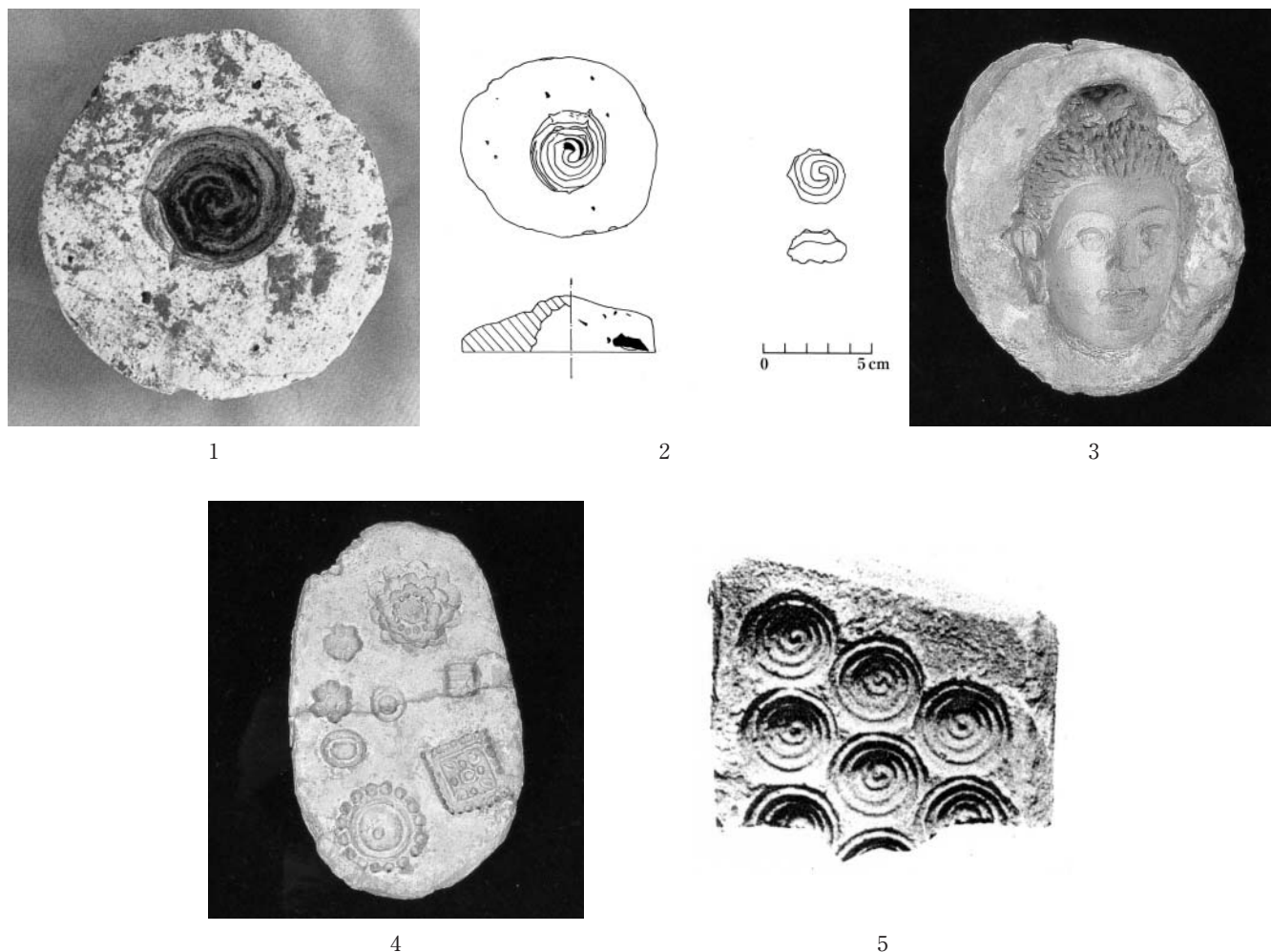


図 17 塑像製作用の石膏製型

1. クラスナヤ・レーチカ第二仏教寺院址出土、螺髪型の型 (加藤 1997: 図 6-49)
2. 同上 実測図 (右) 粘土製螺髪
3. カラ・テバ出土、小仏頭型 (加藤・Pidaev 2002: 図版 23)
4. カラ・テバ出土、装飾文の型 (加藤・Pidaev 2002: 図版 24)
5. 新疆・カダリク遺跡出土、螺髪型の型 (Stein 1981 Pl. XVI, Kha. ii. 0076)

1, 2) が調査団にもたらされた (カワサキ 1997: 49)。これは、ダルヴェルジン・テパ都城址のシャフリスタンで偶然発見された型であり、第二仏教寺院址の廃土で採取されたと伝えられた。遺物は、直径 9.5 cm、高さ 3.4 cm のやや潰れた半球形を呈し、平坦面に大きさの異なる 2 つの杏仁形の窪みがあり、一方の先端には一個の穴が、他方には、三個の穴がつく。どちらも貴石を象嵌した杏仁形飾りを表現したものであることが容易に判別できる。これらの寸法は、 $5.2 \times 2 \times 1.4$ cm と $6.4 \times 3 \times 1.7$ cm である。

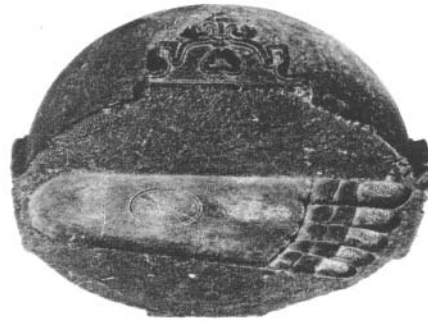
この型に粘土や石膏を流し込み塑像の装身具が作られたと考えられる。第二仏教寺院址出土の塑像を見ると、同様の杏仁形飾りは、菩薩像首飾り (図 11) や塑像断片 (図 16-3) に確認される。これらはいずれも型押しされた石膏

で作られている。ルサーノフ氏によると、雌型に液状の泥 (粘土) を流し込んだ場合、取り出される雄型のサイズは約 10 % 縮小されるが、石膏を流し込んだ場合は、同様な縮小現象は見られないという。筆者は、この認識のもとに、芸術学研究所所蔵の塑像断片を観察したところ、石膏製のサイズとほぼ一致する杏仁形飾りが、石膏製の装飾断片 (図 16-3) にあることを確認した (カワサキ 1997: 50)。この装飾断片は、ロゼットと肩紐の形状から菩薩の首飾りであることがわかる。これまでのところ、ダルヴェルジン・テパの仏教寺院において工房施設は発見されていないが、石膏製の存在は、都城内において塑像制作が行われていたことを裏付けるものであろう。

また、キルギスタンのクラスナヤ・レーチカ第二仏教寺



1



2

図 18

1. 仏足跡 スワート (栗田 2003b: No. 789) 2. ボードガヤー将来の奉献仏塔 (Paul 1985: Fig. 6)

院址でも、石膏製の型と粘土製の螺髪 (図 17-1) が出土しており (加藤 1997: 165)、型の形状は半球形を呈している (図 17-2)。同じく石膏製の型としては、カラ・テパ出土の「小仏頭の型」や「装飾文の型」 (図 17-3, 4) が知られる (加藤 2002: 88)。

紀元 7～8 世紀の仏教遺跡アジナ・テパでも、塑像の頭部に型取りした螺髪や巻き毛を貼り付ける技法がとられていた。報告書によれば、アジナ・テパ伽藍址の XXVI 室と XXXI 室で、螺髪の型が出土したと伝えられている (Литвинский, Зеймаль 1971: 99, примечания 82)¹⁷⁾。

ダルヴェルジン・テパ、カラ・テパ、アジナ・テパ、クラスナヤ・レーチカの型はいずれも寺院の中、もしくはその近辺で出土している。現在のところ、寺院の中に工房に類した施設は確認されていないが、仏像はじめ塑像の製作が仏教施設内部で行われていた可能性を指摘できるであろう。

中国・新疆では、シオルチュクをはじめとした仏教遺跡において石膏製の型が多数発見されており (図 16-5)、個々の型取りを組み合わせ使用し、造形に変化をもたせたことから、「西域塑像美術の大きな特徴は、型取りによる造形」と言われる (宮治 1991: 39)。

これらはいずれも、塑像の細部、あるいは像そのものの大量生産を目的とし、特別に製作された型であり、形状は半球形や平板形が大半で、作業に適した掌サイズである。そして型の殆どが、石膏が生乾きの状態の時に雄型をスタンプして造られている。

一方、基壇模型の底面に施された文様は、焼成前の粘土に雄型の「巻き毛」を型押しして作られたのではなく、道具を使い、彫り込まれていた。上述した菩薩頭部の巻き毛 (図 10, 11) やその他の塑像断片 (図 13-1, 2) と浅彫りの形、寸法 (4.5 × 2.5 cm) を比較してみたところ、浅彫りから取り出される巻き毛は、形状は似ているが、完全に一

致するものは認められなかった¹⁸⁾。また、先に確認したように、浅彫りが焼成後に施されたことや、円座の上に何かを載せるための基台であった可能性が高いことから、問題の基壇模型が製作当初から雌型として利用されたとは考え難い。さらに、図 11 の菩薩像の装身具に貼付された杏仁形飾りが石膏製の型を用いて製作されたことを考えると、同菩薩に見られる頭部の巻き毛をわざわざ焼成粘土製の基壇模型に浅彫りをして造ることは、不自然に思われる。このような理由から筆者は、浅彫りには別の意味が込められているのではないかと考えている。

「蝸牛状文様」の象徴的意味

基壇模型の底面に浅彫りが焼成後直ちに刻まれたか否か定かではないが、ダルヴェルジン・テパ寺院出土塑像の頭髪に似ていること、同じく焼成粘土製小型基台 (図 3-4) が寺院内から出土していること、さらに基壇模型が出土した紀元 7～8 世紀のダルヴェルジン・テパにおいて、仏教寺院や仏教彫刻が存在しないことを考慮すると、仏教寺院活動期に所有者が巻き毛の文様を刻んだ可能性が浮かび上がってくる。

では、この文様が何らかの象徴的意味を有していると仮定した場合、基台や土器などにその対象物を描写する例が見られるであろうか。仏教美術の中では、仏髪 (ターバン) や仏足跡を崇拜する図がしばしば見られるが、スワート将来のレリーフ断片にはストゥーパの基台に仏足跡が彫刻され、それを礼拝する修行僧の姿 (図 18-1) が描写されている (栗田 2003: No.789)。またストゥーパの底面に仏足跡が彫刻された例 (図 18-2) も知られる (Paul 1985: 117-118, Fig. 6)。さらにカラ・テパ、カンブル・テパ出土の土器片に、仏足をスタンプした例がある (Цепова 2001: 103; Вертоградва 1995: ил. 44)。形態は異なるが、タジキスタンのヒシュト・テパ僧院址では、小型ストゥーパの

基台と基壇の間に経文が印刻された粘土板が出土した (Муллоканов 1990: 17; 加藤 1997: 60-62)。これらの例から、基壇模型の底面に、仏教徒の崇拝の対象であった仏陀・菩薩像の頭髪を形象化した可能性を見出すことができるのではないだろうか。

杉本卓洲氏は、『インド仏塔の研究』の中で、如来の髪塔、爪塔について様々な仏教文献を繙き、考察された (杉本 1984: 249-257)。以下、杉本氏の研究に従うと、玄奘は『大唐西域記』の縛喝国 (古代のバクトリア) の条で、仏陀の生存中に建立、供養された最初の仏塔が髪塔と爪塔であることを伝えている (杉本 1984: 250; 玄奘・水谷 1971: 26)。これは、釈迦が成道した後、二人の長者に教を説く中で、釈迦が二人に与えた髪と爪の供養について述べたもの (「提謂城と波利城」) で、諸々の仏典に見られる説話であるという。『マハーヴァスツ』によると、「仏陀は自ら髪と爪を切って、それをウッカラ出身の二商人トラブシャとバリカに与え、髪塔 (kesa-stūpa) と爪塔 (nakha-stūpa) を建てるように命じたと語られ、髪塔はケーシャスターリン (Keśasthālin)、爪塔はヴァールクシャ (Valukṣa) という処に建てられたという」 (杉本 1984: 250-251)。このほか、杉本氏は、髪塔、爪塔の起塔法、供養法に関して、『仏本行集経』、『十誦律』、『根本有部尼陀那目得迦』などの記述を詳しく紹介し、仏陀の遺物の中でも、「遺骨について、髪や爪が特に崇拝の対象として選ばれたことは注目すべきである」と論じた (杉本 1984: 255)。『大唐西域記』には、髪塔、爪塔の記述が各所に見られ (桑山・高田 1999: 788)、仏陀の遺物の中でもとりわけ篤く信仰されていたことが伺われる (杉本 1984: 255)。

本題に戻れば、玄奘時代の仏教徒が仏陀の髪を崇拝したように、ダルヴェルジン・テパ在住の修行僧あるいは在家の仏教徒が、彼の所有物に帰せられる基壇模型に、崇拝の対象である仏陀・菩薩の髪を刻み込むこと自体に意味付けを行っていたのではないかと、筆者は考える。第二仏教寺院址の発掘では、塑像および断片から見て、少なくとも5体の仏陀像および7体の菩薩像 (2体は残高230 cmを越す) が出土しており、仏陀とともに菩薩 (像) への畏敬の念の表れが強く感じられる (Ртвеладзе 2005: 168)。アムダリア以北では、古テルメズ、ザール・テパ、バラト・テパ、イスマイル・テパ、アク・カラからテラコッタ製菩薩像が出土しており、仏陀像とともに菩薩像も崇拝の対象としていたことを物語る。

中世初期における基壇模型の用途

以上述べてきたように、基壇模型は、仏教寺院活動期の遺物と見ることができる。では、果たしてこの基壇模型が何故に中世初期の住居址で発見されたのか。またその利用

目的は何であったのか。ダルヴェルジン・テパ城砦址の発掘では、中世初期の遺構で、白色石灰岩製柱礎が発見された。これは、一辺76 cm、高さ42.5 cmのアッティカ式柱礎である。柱礎の出土場所を清掃したところ、床面に設置された形跡が確認されなかったことから、恐らくダルヴェルジン・テパのシャフリスタンから搬入されたものと考えられる (田辺・堀 1999: 122)。また、ペンジケントの中世の寺院では、より古い時代の建物から持ち込まれたと思われるアッティカ式柱礎が出土している (Ставиский 1964: 7-10)。従って、基壇模型もまた、中世初期の城砦の住人によって、シャフリスタンから搬入された可能性が高い。

一方、発掘では、部屋の床面から基壇模型と共に平底の碗が割れた状態で出土した¹⁹⁾。この碗の直径は10 cm、高さ2.4 cmである。碗は轆轤で整形され、外面はヨコナデで調整し、内面には、油煤が付着していた (カワサキ、Русанов 1998)。これは、碗の内部で火がかすかに燃えていたのではなく、激しく燃え上がっていたことを示している。器壁に深く浸透するほど煤が付着する例は、灯明皿や奉獻祭壇に見られる。これは、灯明皿の中で油または脂肪が燃やされ、祭壇の中で、油に浸した布切れ類が燃やされたことと関係している。彫刻やコイン (例、ササン朝ペルシアのドラクマ) でも、祭壇の中で炎をあげる図柄がよく見られる。灯心の先端部分に当たる注口だけに煤の付着が限られている灯明皿とは異なり、基壇模型と共に出土した碗の口縁部全体に煤が付着していた。これは、かつて碗の中で炎が立ち上がっていたことを示しており、日常的に使用される灯明皿ではなく、限られた時間の中で執り行われた宗教的儀式に用いられた可能性を示唆している。炎が立ち上がる、器高が極めて低い碗を素手で手にすることは不可能に近く、何らかの台の上に載せて使用したと考えるほうが自然である。また、基壇模型の表面に煤の痕跡が見られることから、基壇模型は碗と一対に用いられた台であり、持運び可能な家庭用祭壇に供える灯明皿の台であった可能性を導き出せるのではないだろうか²⁰⁾。ここで、興味深い事実を述べておきたい。基壇模型と碗が出土した部屋の炉の下ではテラコッタ製女神像が発見された (Ильясов 1997: 43)。一方、カンブル・テパの第93号室では奉獻用祭壇と女神像が伴出し、テパイ・シャーでは、表採ではあるが、小型礎石と女神像が発見されている。これらの因果関係は未だ不明であるが、古代から中世初期における女神崇拝の様相について、祭壇の存在が重要な鍵を与えてくれるのではないかと思う²¹⁾。

以上の考察により、本資料は、中世初期 (紀元7～8世紀) のダルヴェルジン城砦の住人によって利用されたものと考えられる。

おわりに

以上、基壇模型の用途について考察してきたが、筆者の現段階での考えをまとめておきたい。

1. 基壇模型は、紀元1～4世紀の仏教寺院活動期に製作され、仏塔の模型（基台）の可能性が考えられる。
2. 底面の文様は、焼成前のスタンプ押しではなく、焼成後に浅く刻まれたものである。
3. 文様は塑像頭部の巻き毛を表わしており、塑像制作の型として利用された可能性は低い。
4. 仏陀・菩薩像崇拝の象徴として巻き毛が刻まれた可能性がある。
5. 中世初期の所有者は、基壇模型を家庭用祭壇に供える灯明皿の台として利用していた可能性がある。

このように本資料は、古代（紀元1～4世紀）から中世初期（紀元7～8世紀）にかけて使用され、時代にとともに、その用途の多様性が窺える極めて特異な遺物であるといえるだろう。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、下記の方々にご教示、ご協力を賜りました。古代オリエント博物館の石田恵子先生には文様の鑑定をはじめ、貴重なご助言をいただくとともに、同館の資料を活用させていただきました。図8の資料については、長年未発表資料でしたが、タシュケント・芸術学研究所のトゥルグノフ先生 Dr. Turgunov、イリヤソフ先生 Dr. Ilyasov のご承諾をいただき、今回紹介することができました。また、創価大学・国際仏教学高等研究所の辛嶋静志先生には仏塔に関する文献をご紹介いただき、同大学の小山満先生のご指導を仰ぎました。英文要旨作成では創価大学の半沢伸枝さんに、挿図作成では阿部貴美江さんにご協力を賜りました。このほか、加藤九祚先生の著書に多くの示唆を受け、新疆師範大学の広中智之氏に貴重なご助言をいただきました。さらに査読の先生方より、重要なご教示をいただいたことで、考察を深めることができました。掲載の機会を与えていただいた本誌編集委員会の先生方をはじめ、ご協力いただきました方々に深くお礼申し上げます。最後に、2007年2月16日に永眠なされたガリーナ・アナトリエヴナ・プガチェンコワ先生 Галина Анатольевна Пугаченкова に本稿を捧げます。

註

- 1) 仏教彫刻の年代については、紀元2世紀から6世紀までの諸説があり、寺院の活動時期を含め、年代問題は未解決のままであるが、ここではクシャン朝期以降とした。年代問題については稿を改めたい。
- 2) 日本隊の調査については、以下の通り。1989～1993年、創価大学シルクロード調査団（団長：加藤九祚教授）による第二仏教寺院址発掘調査。1995年、加藤九祚教授による継続調査。1996～2000年、鎌倉シルクロード研究所（団長：田辺勝美教授）による城砦址および墓地の発掘調査。2006年、創価大学シルクロード研究センター（団長：小山満教授）による第二仏教寺院址発掘調査。
- 3) スルハンダリア州がトハリスタンという文化史的地域に編入された紀元5～8世紀は一般に中世初期と称される（創価大学・ハムザ記念芸術研究所 1991: 30）。
- 4) 本資料出土時は第2号室であったが、その後発掘の拡張に伴い、

- 第3号室に改称された（遺構については Русанов 2000 を参照）。
- 5) 遺物名については、調査概報「ダルヴェルジン・テパ城砦址の発掘（1996年度）」では、「基壇モデル」と記述されているが、ここでは小型の遺物であることを明確にするために、「基壇模型」とする。
- 6) 古典古代における芸術の発展史には早期（前3～2世紀）、中期（前1世紀～紀元1世紀）、成熟期（紀元2～3世紀）の3段階がみとめられる（創価大学・ハムザ記念芸術学研究所 1991: 34）。
- 7) カラ・テパでは、壁に据えられた粘土製の供物台が検出された。これはΠ状の脚を呈している（Mkrtychev 1993/94 p. 105, fig. 9）。
- 8) 本資料とカンブル・テパ出土の奉献用祭壇の類似性については、報告書で指摘されている（田辺 1996: 113）。
- 9) クルバノフは、帽子 petasos（Гушина 1989: 427）を被る王 basileus の可能性を指摘している。なお、図版は（創価大学・ハムザ記念芸術学研究所 1991: 289, No. 174）を参照のこと。
- 10) ササン、クシャノ・ササン、キダラ・クシャンのコイン（田辺 1993: 図 44, 50, 53, 90 135）に方形基壇が見える。またオスアリの例としては「聖火儀式を表した納骨器」（田辺・前田 1999: 210, fig. 140）を参照のこと。
- 11) 今回、芸術学研究所のトゥルグノフ氏（Dr. B.A. Turgunov）のご厚意により資料紹介および写真掲載の承諾をいただいた。筆者がこの遺物を最初に実見したのは、1994年である。芸術学研究所のイリヤソフ氏（Dr. Dj. Ilyasov）によれば、DT-25地点での表採であるという。
- 12) 論文については、辛嶋教授にご教示いただいた。
- 13) 新疆師範大学の広中智之氏のご教示によると、木製の仏塔（銀製の仏塔を除く）は、現在、蘭州の「甘粛省博物館」に収蔵されており（張広達、榮新江『于闐史叢考』上海書店、1993年、63頁、69頁注9）、またニヤ出土の木製仏塔（高さ16.5cm）も存在するという（Stein 1921, Serindia, Vol.1, p.247; 『シルクロード・新疆仏教芸術』（新疆大学出版社、2006年161頁の図7））。
- 14) 2006年に再開した創価大学シルクロード研究センターによる第二仏教寺院址の発掘において、焼成粘土製の円形基壇模型が出土した。これにより、本資料の製作年代が古代に求められることは一層明らかとなった。これについては、近く調査概報にて報告する予定である。
- 15) ダルヴェルジン・テパ出土のコインで、発行王の同定されたコインは次の通りである〔 〕内は、発行王。
DT市街区および城砦址出土のコイン（Пугаченкова, Рутвеладзе: 227-231）＝グレコ・バクトリア・コイン…〔エウティデーモス〕、グレコ・バクトリア・模倣コイン…〔ヘリオクレス〕、クシャノ・コイン…〔ソーテル・メガス、カドフィセス2世、カニシュカ1世、フヴィシュカ、ヴァースデーヴァ、カニシュカ3世〕、ポストクシャノ・コイン…〔フヴィシュカ模倣コイン、ヴァースデーヴァ模倣コイン、カニシュカ3世模倣コイン、カニシュカ3世（？）模倣コイン〕、クシャノ・ササン・コイン…〔クシャノ・ササン支配者〕、エフタル・コイン〔ペーローズ模倣コイン〕、チャガニアン・コイン、シャイバーニー朝・コイン。
DT-25出土のコイン（創価大学シルクロード学術調査団 1996: 150-152）＝グレコ・バクトリア・コイン…〔エウティデーモス〕、クシャノ・コイン…〔ソーテル・メガス、カニシュカI世、フヴィシュカ、ヴァースデーヴァ、カニシュカ3世〕、ポストクシャノ・コイン…〔フヴィシュカ模倣コイン、ヴァースデーヴァ模倣コイン、カニシュカ3世模倣コイン〕、クシャノ・ササン・コイン…〔ペーローズ、ホルムズド1世、ワラフラン1世、

その他小銅貨]。

DT 城砦址出土のコイン (田辺・堀 1996, 1997, 1998, 1999; 田辺・山内 2000) = チャガニアン・コイン、円形孔銅貨、方形孔銅貨、銅貨、ホスロー I 世・ドラクマ。この他、ササン朝のシャープル I 世のドラクマ貨がシャフリスタンから出土している (Ртвеладзе 1999: 151)。

- 16) 渦巻き文様の遺例として、ピプラーワー・ストゥーパの中の石棺から発見された直径 5cm の円形金板は興味深い。この金板全体に渦巻き形の装飾が見られる (杉本 1984: 346, 挿図 48. a)。
- 17) アジナ・テパの塑像の頭髪は左右対称の螺旋、巻き毛であり、別々の型で造られたと報告されているが、型の写真、図が掲載されていない為、その形状は不明である。
- 18) 検証方法としては、実際に浅彫りから取出した巻き毛を用い、ハムザ芸術学研究所蔵の全ての断片と比較して行った。浅彫りの一部が壊れているため、完全な形の巻き毛を作り出すことはできなかった。また、出土した巻き毛の多くが緩やかな弧状を呈し、厚みがあるが、浅彫りから取出した巻き毛は扁平で厚みは他のどれよりも薄かった。検証に際しては、ルサーノフ氏の協力を得た。
- 19) 発掘を担当したルサーノフ氏の報告による。
- 20) A. ミルババエフは、移動用の拝火壇には、金属、石、粘土製があり、これまで香炉 *kuril'nitsa* と呼ばれたものは、誤りで香炉ではなく、中世ペルシア・タジクの文献に書かれる移動用拝火壇「ミジュルマ」であるとしている (ミルババエフ・加藤 2006: 31)。
- 21) イノストランツェフ著『ササン朝ペルシアの文化史に関するアラビア語史料：民間伝承と迷信』(Иностранцев 1907) には、9 世紀の Abu 'Uthman 'Amr Ibn Bahr al-Jahiz に起源を求められる中世アラビア語史料 (14 世紀) の翻訳と研究があり、ササン朝時代の習俗について詳しく綴られている。このテキストには、灯明皿や祭壇の火と占いにに関する若干の記述があり (同: 147)、イノストランツェフは、火を祭る儀式について詳述している。この中で特に注目されるのは、妊婦がいる家の中で、聖なる火を祭ることが魔よけの役目を果たしていたということである (同: 214)。また本テキストと「アイン・ナーメ」の火に関する記述に立脚し、古代のある時期には、神殿だけではなく、屋内にも祭壇が設けられ、火が崇められていたことを指摘した (同: 215)。プガチェンコワとルトヴェラーゼもこの記述に注目したが (Пугаченкова, Ртвеладзе 1978: 208-209)、筆者はダルヴェルジン・テパをはじめ、各遺跡で発見されている家庭用祭壇と女神信仰の関係に加えて、小型礎石、奉獻祭壇、小像などの小型遺物の使用法についても今後検討していく必要があると考えている。

参考文献

- Bernard, P. 1970 Campagne de fouilles 1969 à Aï Khanoum en Afghanistan. In *Comptes rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-lettres*, 301-349.
- Вертоградва 1995 *Индийская эпиграфика из Кара-тепе в Старом Термезе*. Москва.
- Дьяконов, М. М. Археологические работы в нижнем течении реки Кафирниган (Кобадиян) (1950-1951 гг.). *Материалы и исследования по археологии СССР*. Москва-Ленинград.. № 37. 1953. с. 285, рис. 20.
- Francfort, H.-P. 1984 *Fouilles d'Aï Khanoum, III. Le sanctuaire du temple à niches indentées*. MDAFA XXVII, Paris.
- Guillaume, O. et A. Rougeulle 1987 *Fouilles d'Aï Khanoum, VII: Les petits objets*. MDAFA : XXI, 70-71, Pl. XIX, 23.
- Гушина, Е. В. (ред.) 1989 *Словарь античности*. Москва, Прогресс.
- Ильясов, Лж. Я. 1995 К вопросу о датировке буддийских храмов Дальварзинтепа. *Археология и художественная культура Центральной Азии*. 2: 26-28. Ташкент.
- Ильясов, Дж. Я. 1997 Мелкая пластика, *Материалы полевых исследований Узбекитанской Искусствоведческой Экспедиции (УзИскЭ)* 1: 43-48. Ташкент.
- Иностранцев, К. 1907 Материалы из арабских источников для культурной истории сасанидской персии. *Записки восточного отделения императорского русского археологического общества*, 18: 113-232.
- Кавасаки, К. 1997 Матрица из Дальварзинтепа. *Материалы полевых исследований Узбекитанской Искусствоведческой Экспедиции (УзИскЭ)* Выпуск 1: 49-50. Ташкент.
- Кавасаки, К., Д. В. Русанов 1998 Культ бодхисаттвы на Дальварзинтепа. *Сангъатшунос' илмий мақолалар тўплами* 1: 95-98. Ташкент.
- Курбанов, С. 2000 С. Археологические исследования цитадели Кампыртепа. *Материалы Тохаристанской Экспедиции. Археологические исследования Кампыртепа*. Выпуск 1: 39-74. Ташкент.
- Литвинский Б.А., И.Р. Пичикян 2000 *Эллинистический храм Окса в Бактрии (Южный Таджикистан). Т. 1: Раскопки, архитектура, религиозная жизнь*. Москва.
- Литвинский, Б. А., А. В. Седов 1983 *Тепан-Шах' культура и связи кушанской Бактрии*. Москва.
- Литвинский, Б. А., Т. И. Зеймаль 1971 *Аджина-Тепа. Архитектура, живопись, Скульптура*. Москва.
- Litvinskii, B. A. and T. I. Zeimal' 2004 *The Buddhist Monastery of Ajina Tepa, Tajikistan. History and Art of Buddhism in Central Asia*. IsIAO, Rome.
- Mkrtychev, T. K. 1993/94 Buddhist Ritual of Kara-tepe – based on materials of Complex E. *Silk Road Art and Archaeology* 3: 97-112.
- Мкртычев, Т. К. 1996 Предварительные итоги работ в комплексе Е (1987-1989 гг.). *Буддийские комплексы Кара-тепе в Старом Термезе*, 97-115. Москва.
- Мкртычев, Т. К. 2002 *Буддийское искусство Средней Азии (I-X вв.)* Москва.
- Муллокандов, М. 1990 Раннесредневековый буддийский монастырь Хишт-тепа в Ховалингском районе Таджикистана. *Информационный бюллетень*. Выпуск 17: 12-20.
- Paul, D. 1985 Antiquity of the Visnupada at Gaya Tradition and Archaeology. *East and West* 35-1-3: 103-141.
- Пилипко, В. Н. 1985 *Поселения Северо-Западной Бактрии*. Ашхабад.
- Пугаченкова, Г. А. 1945 Фрагменты эллинистической архитектуры провобережного Тохаристана. – *Термезская археологическая экспедиция* 2: 65-81. Ташкент.
- Пугаченкова, Г. А., Л. И. Ремпель 1965 *История искусств Узбекистана*. Москва.
- Пугаченкова, Г. А. 1973 Новые данные о художественной культуре Бактрии. *Из истории античной культуры*

- Узбекистана, 88-92, рис. 7, 9. Ташкент.
- Пугаченкова, Г. А. 1989 В поиске культурных ценностей прошлого. *Античные и раннесредневековые древности Южного Узбекистана*, 7-24. Ташкент.
- Пугаченкова, Г. А., Э. В. Ртвеладзе и др. 1978 *Дальверзин-тепе – кушанский город на юге Узбекистана*. Ташкент.
- Пугаченкова, Г. А., Б. А. Тургунов 1989 Новые буддийский памятник в южном Узбекистане. *Памятники культуры. Новые открытия. Ежегодник 1988*. 519-530. Москва.
- Ртвеладзе, Э. В. 1999 *Великий шелковый путь. Энциклопедический справочник*. Ташкент.
- Ртвеладзе, Э. В. 2005 *Цивилизации, государства, культуры Центральной Азии*. Ташкент.
- Русанов, Д. 2000 а Итоги раскопок на объекте ДТС-4. *Материалы полевых исследований Узбекстанской Искусствоведческой Экспедиции (УзИскЭ)* 4: 5-7. Ташкент.
- Русанов, Д. 2000 б Градостроительная культура Кампыртепа эпохи кушан. *Материалы Тохаристанской Экспедиции. Археологические исследования Кампыртепа* 1: 19-32. Ташкент.
- Сверчков, Л. 2001 Раскопки в северо-восточной части Кампыртепа. *Материалы Тохаристанской Экспедиции. Археологические исследования Кампыртепа* 2: 47-64. Ташкент.
- Ставиский, Б. Я. 1964 *Кара-тепе – буддийский пещерный монастырь в Старом Термезе*. Москва.
- Ставиский, Б. Я. 1972 *Буддийский культовый центр Кара-тепес Старом Термезе*. Москва.
- Stein, A. 1981 *Serindia. Detailed Report of Explorations in Central Asia and Westernmost China*. Delhi.
- Тургунов, Б. А. 1973 К изучению Айртама. *Из истории античной культуры Узбекистана*, 52-77. Ташкент.
- Тургунов, Б. А. 1989 Раскопки второго буддийского храма на Дальверзинтепе (предварительное сообщение) *Античные и раннесредневековые древности Южного Узбекистана*, 81-95. Ташкент.
- Тургунов, Б. А., Дж. Я. Ильясов, А. А. Восковский 1997 Предварительные итоги раскопок Узбекско-японской Бактрийской экспедиции на цитадели Дальварзинтепа в 1996 году. *Материалы полевых исследований Узбекстанской Искусствоведческой Экспедиции (УзИскЭ)* 1: 6-25 Ташкент.
- Тургунов, Б. А., Д. В. Русанов, А. А. Восковский 1999 Итоги археологических исследований на цитадели городища Дальварзинтепа в 1998 году. *Материалы полевых исследований Узбекстанской Искусствоведческой Экспедиции (УзИскЭ)* 3: 5-9. Ташкент.
- Цепова, О. 2001 Керамика со штампованным орнаментом из Кампыртепа. *Материалы Тохаристанской Экспедиции. Археологические исследования Кампыртепа* 2: 101-112. Ташкент.
- Зеймаль, Т. И. 1987 Буддийская ступа у Верблюжьей Горки. *Прошлое Средней Азии*. 70-78. Душанбе
- 岩井俊平 2003 「ポスト・クシャン期バクトリアの土器編年」『西アジア考古学』第4号 41-54頁。
- 加藤九祚 1990 「ダルヴェルジン・テペ都城址の二つの仏教寺院」『アジア諸民族の歴史と文化』(白鳥芳郎教授古稀記念論集) 六興出版 187-204頁。
- 加藤九祚 1997 『中央アジア北部の仏教遺跡の研究』(シルクロード学研究 4) シルクロード学研究センター。
- 加藤九祚・Sh. Pidaev 2002 『ウズベキスタン考古学新発見』東方出版。
- 桑山正進・高田時雄(編) 1999 『大唐西域記』(西域行記索引叢刊 I) 松香堂。
- 栗田功(編著) 2003a 『ガンダーラ美術 I 仏伝』改定増補版 二元社。
- 栗田功(編著) 2003b 『ガンダーラ美術 II 仏陀の世界』改定増補版 二元社。
- 玄奘(水谷真成訳) 1971 『大唐西域記』(中国古典文学大系 22) 平凡社。
- 小山 満 1996 「相当年代」『ダルヴェルジン・テパ DT25 (1989-1993 発掘調査報告)』125-131頁。
- 杉本卓洲 1984 『インド仏塔の研究—仏塔崇拝の生成と基盤—』平楽寺書店。
- スタヴィスキー(加藤九祚訳) 2002 「カラ・テパに関する新考察: 1978-89年の発掘に関する若干の総括」加藤九祚『Ay Khanum 2002 アイハヌム 加藤九祚一人雑誌』東海大学出版 1-22頁。
- 創価大学・ハムザ記念芸術学研究所 1991 『南ウズベキスタンの遺宝』。
- 創価大学シルクロード学術調査団(編) 1996 『ダルヴェルジンテパ DT25 (1989~1993 発掘調査報告)』。
- 田辺勝美 1993 『平山郁夫コレクション シルクロード・コイン展 カタログ』シルクロード研究所。
- 田辺勝美・堀 咲他 1996 「ダルヴェルジン・テペ城砦址の発掘 (1996 年度)」『古代オリエント博物館紀要』17 巻 102-115頁。
- 田辺勝美・堀 咲他 1997 「ダルヴェルジン・テペの発掘 (1997 年度概報)」『古代オリエント博物館紀要』18 巻 157-212頁。
- 田辺勝美・堀 咲他 1998 「ダルヴェルジン・テペの発掘 (1998 年度調査の概報)」『古代オリエント博物館紀要』19 巻 73-126頁。
- 田辺勝美・堀 咲他 1999 「ダルヴェルジン・テペの発掘 (1999 年度調査の概報)」『古代オリエント博物館紀要』20 巻 101-154頁。
- 田辺勝美・前田耕作(編) 1999 『中央アジア』世界美術大全集東洋編 15 小学館。
- 田辺勝美・山内和也他 2000 「ダルヴェルジン・テパの発掘 (2000 年度調査の概報)」『古代オリエント博物館紀要』21 巻 89-151頁。
- 中村元・久野健(監修) 2002 『仏教美術事典』東京書籍。
- 水野清一(編) 1970 『チャカラク・テペ』京都大学。
- 宮治 昭 1991 「西域の仏教遺跡と彫塑美術」『ドイツ・トゥルフアン探検隊西域美術展』朝日新聞社 29-40頁。
- ミルババエフ(加藤九祚訳)「シルクロードの宗教と俗信(5-8世紀)ーソグド・タジクを中心として」加藤九祚著『Ay Khanum 2006 アイハヌム 加藤九祚一人雑誌』東海大学出版 1-72頁。
- 吉田 豊 2003 「イラン語圏の仏塔信仰とイラン語仏典」『論集「原典」「古典学の再構築」研究成果報告集 II』神戸 217-238頁。
- 吉田 豊 2005 『コータン出土 8-9世紀のコータン語世俗文書に関する覚え書き』(神戸市外国語大学研究叢書 第38冊) 神戸市外国語大学。
- リョーヴシュキナ, S. V. 1996 「文物および美術品の修復と技術」

『ダルヴェルジンテバ DT25 (1989~1993 発掘調査報告)』
140-149頁。

川崎 建三
創価大学シルクロード研究センター
Kenzo KAWASAKI
The Silk Road Research Center of Soka University